石巻復興NEWS
石巻専修大学　経営学部　丸岡ゼミ　平成 23 年 8 月 31 日発行　第 2 号

ボランティアに感謝

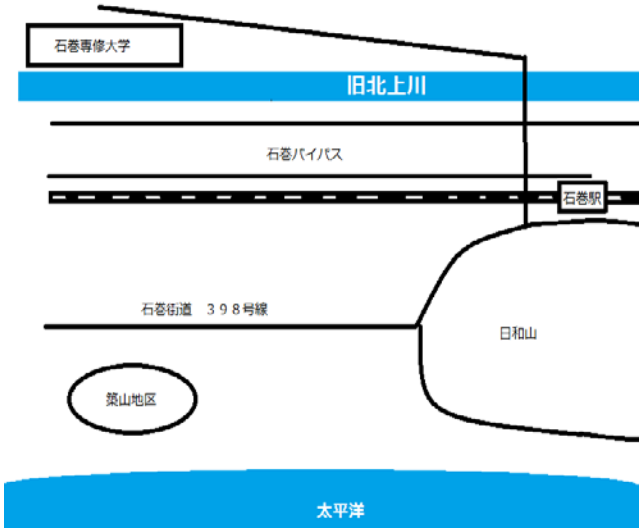
「とにかく感謝してもしきれません。」

こう語るのは 40 代後半の男性 O さんです。

私（記者）は以前がれき撤去のボランティアを行い、その時のご感想を伺いたいと考えていました。しかしそのお宅が不在であったため、周辺の様子を伺っていると O さんにお会いしました。

O さんの住む築山地区は石巻港から約１ｋｍ北にあります。波が引きある程度片づけが進んだ今でも道端に土のうが積まれ、水たまりには虫が湧いています。

津波の被害で全半壊した家が多くありました。ここに O さんは今も住み続けています。



築山地区周辺図

地震後ほどなくして O さん宅にも津波が押し寄せました。約 5 分で 1m80ｃｍの高さまで到達し、O さんも約 250m流されました。

波が引いた後は自宅や納屋には瓦礫や泥が残っていました。布団やトイレは無事であったため、避難所には行かず自宅での生活することを選択。しかし、給水所は家から約 2ｋｍ離れた日和山にあり、車が流された O さんは運べる量が限られていました。体力の問題から 1 回につきポリタンク 1 個しか運べませんでした。

そこからは臭いとの戦いが始まりました。酸味が強い肥料の臭いが泥から漂い、朝に目が覚めても現実を見せつけられるようで憂欝になりました。

O さんは自宅の整理のため畳を上げようとしました。しかし水を吸い重くなっており、また持ち上げるための持ち手がないことから想像以上の重労働でした。作業は腰への負担が大きく、ぎっくり腰になってしまいました。

ボランティアが片付けた納屋

家族だけでの片づけに限界を感じた O さんは、市役所へ依頼に行きました。ところが行列ができており、1 度は並んだものの、諦めて自宅に引き返しました。そこで市役所に行くよりも、直接ボランティアに依頼したほうが早いと考えお願いしました。

ボランティアの方が O さん宅を訪れたのは震災から約 2 カ月後、5 月に入ってからでした。ボランティアは 2 度にわたって訪れ、1 度目は庭を、2 度目は納屋の整理をしました。これにより全体の作業の半分まで進みました。

納屋が整理されたことにより生活スペースが増えました。朝に目を覚まし最初に見る風景が綺麗に整理され、見慣れた風景であること、悪臭のしないことはその日の活力になりました。

最後にボランティアの方たちに対する要望を伺いました。

―「またボランティアの方に来てほしいですか？」

O さん「まだやってもらいたいことはたくさんあります。どんな人でも大歓迎です。」

―「早急に周辺でボランティアの方の力が必要な場所はありますか？」

O さん「側溝の処理をしていただきたいです。泥で埋まり、これから大雨が降ると溢れ出す危険があります。ぜひともお願いいたします。」

（松田浩典、後上勇貴、閻虹雪）

築山地区の泥で埋まった側溝

炊き出し拠点の居酒屋「廣山」厨房

ピースボート ー国際交流と災害ボランティアー

ピースボートは、1983 年に設立された非営利の国際交流団体です。地球 1 周をはじめとする「国際交流の船旅」の計画とともに、国内外における国際協力活動を行っています。これまでに多くの外国や日本でも緊急災害支援を行っています。元々ピースボートは主に海外で活動していましたが、阪神淡路大震災をきっかけに国内での緊急災害支援を行うようになりました。

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災を受けて、ピースボートでは緊急支援チームを結成しました。3 月 17 日という地震から 6 日間しか経っていない状態で、宮城県内にボランティア団体として足を踏み入れるには時期尚早という議論もありました。しかし、ピースボートは新潟を経由して早い段階から宮城県石巻市に入りました。そして現地の社会福祉協議会や他の NGO などと協力して支援活動を行っています。活動内容は炊き出しや食事のデリバリー、物資の搬送、泥のかきだしなど多岐にわたります。

多くの人数が集まった中で、ほとんどのボランティア団体では外国人を受け入れる態勢が出来ていませんでしたが、国際交流活動を行ってきたピースボートは外国人を受け入れる態勢が整っていました。

ピースボートは民家の泥かきで活躍しました。自衛隊は法律上、民家に手が届きませんが、ピースボートは社会福祉協議会を通じて住民のニーズを汲み取り、ボランティア活動を実施してきました。そして、他団体とともに駅前の商店街の泥かきまでも全て行いました。

ピースボートの山本隆さん（代表理事）によると、「泥かきという仕事は、ただでさえ重労働であるが、水を含んだ畳などを撤去する作業は男の人 6 人でも大変な仕事」だそうです。海水を吸った畳は 160 キロを超える重さになるということでした。

今では泥かき作業の他、排水溝の掃除も行っています。

数多くのボランティアの中でピースボートは中心となり、石巻の復興において活躍をしています。

（鈴木愛佳、佐藤美紀、小沼芙実、菅原悠太郎）

灯ろう流しボランティア体験

私たち石巻専修大学の学生は有志を募り、7 月 31 日に行われた川開き祭り前夜祭の“流燈”（灯ろう流し）にボランティアとして参加しました。

今年の川開き祭りは今年の 3 月 11 日に発生した東日本大震災の慰霊と復興に主眼を置いて開催され、前夜祭に行われた流燈は慰霊のシンボルとして大きな意味を持ちます。

今年は震災犠牲者を弔う為に、1 万基の灯ろうを準備することになりました。

この灯ろうの作成とそれを流す作業のサポートを石巻災害復興支援協議会、オンザロード、四万十塾、日本財団、ピースボート、め組 JAPAN 等の団体と一緒に行いました。

一口に灯ろうの作成と言ってもその作業量は多く、下皿すべてに防水スプレーを塗り、そこからロウソクを立てて外枠を組み、出来上がったものを保管場所まで運搬するという一連の工程があります。

1 万個という数を前に、個々の力だけでは、作業が円滑に進みません。実際に、次々作成される灯ろうを運搬の工程で捌ききれなくなり、作業が停滞してしまう場面がありました。

しかし、そこで私たちが驚いたのは、誰かがハッキリとした指示を出したわけでもなく自然と運搬に関わる人手が増えていき、最終的には効率的なバケツリレー方式へと修正できていたことです。まさに意志の統一が生み出した連携に他なりません。

その後も全ての人々が協力体制で作業に臨み、無事に 1 万個の灯ろうを川に流すことができました。

私たち学生の力は僅かなものでしたが、ボランティアの方々の団結力を肌で感じる、そんな活動体験となりました。

（越中岳晴、柿沼志朗、西條貴士）

色とりどりの灯ろう

皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。
E-mail　senshu-maruoka@inter7.jp